

令和6年度の水稲高温障害対策について

～今後の水管理～

過去、本県の平成22年産米において、登熟期の高温障害により白未熟粒（心白粒・乳白粒・基部未熟粒など）が多く発生し、特に平坦部の「ヒノヒカリ」では1等米比率が大きく低下しました。

令和5年には夏季の高温により、全国的に水稲の高温障害が発生しました。本県でも高温障害の発生により、前年に比べ1等米比率が約5%低下しました。

令和6年6月25日付大阪管区气象台発表の「近畿地方3か月予報」によると、近畿地方の7月から9月の平均気温は「高い」となる確率が60%であり、「ヒノヒカリ」の登熟期の気温が高温で推移する可能性が高いと考えられます。

出穂期以降、登熟期に気温の高い状態が続くと、白未熟粒などの高温障害が発生する可能性があります。出穂期以降の気温に十分注意し、高温障害を受けないよう、下記のとおり適期に適切な栽培管理を行いましょう。

<これから特に重要となる水管理>

良質な米づくりのためには適切な水管理が欠かせません。移植から分けつ期までの水管理は、保温、肥料の吸収、雑草の抑制等に重要な役割を果たしてきました。これからは、開花及び登熟等を促すためにますます重要となってきます。

水管理による高温障害対策

- 出穂～開花期は、最も水を必要としますので水田の水を絶やさないようにします。出穂から、約30日間は、土が乾きすぎないように注意し、ときどき水を入れます。この時期に水田が乾燥すると、高温障害が発生しやすくなります。
- 高温（特に高夜温）による稲株の消耗が高温障害の発生を助長します。水利の良い田では、開花期以降に掛け流し等の水管理を行い、地温や水温を下げて稲の消耗を抑えることで、品質低下の度合いを減らすことができます。
- 刈り取り作業のしやすさを優先して早期に落水すると、未熟米や胴割れの増加により品質が低下しやすくなります。特に高温下では品質低下が一層助長されますので、収穫作業に支障のない限り、できるだけ落水は遅らせます。

収穫の間際まで稲の活力を維持することが重要です

水管理のイメージ

